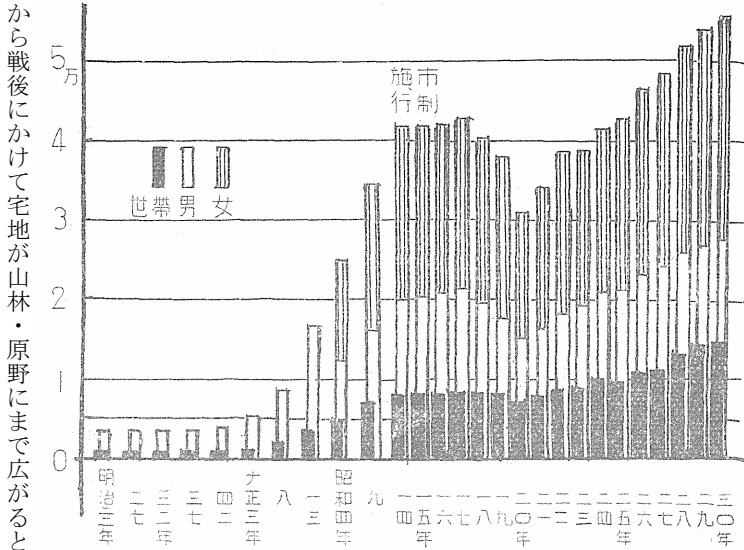


第五章 都市の地域構造と市民生活

(一) 都市の形成と地域の分化

人口の激増 近代的住宅都市芦屋の形成過程は人口の推移によく現われている。すなわち明治二二年の村制施行当時三二〇〇余人に過ぎなかった当市では、同三八年の阪神電鉄の開通、大正二年の国鉄芦屋駅の設置を機会に都心部より以南の人口が増加し始め、更に同九年の阪急電鉄の開通で山手の人口も増加し始めた。その結果当市の人口は大正中期中に一〇、〇〇〇余人、昭和の初めに二〇、〇〇〇余人、更に同六年には三〇、〇〇〇人を越え、市制が施行された同一五年には四〇、〇〇〇余人になった。戦災で一時人口が減少したが最近では五〇、〇〇〇人を越え、住宅都市としてはかなり多数の人口を持つことになった。

芦屋市は本邦都市に珍らしく市域の拡張がなかったため人口の増加はそのまま人口密度の稠密化となつて現われた。すなわち、明治の中期中に一方軒の人口密度は二〇〇―三〇〇人であったが、大正年間に一、二〇〇人を越え、さらに昭和一五年の市制施行当時には二、六〇〇余人に上つた。戦災で一時減少した人口密度も、その後再び大きくなり、最近では三、二〇〇余人に上つているし、山地面積を除いた市街地の人口密度の平均は九、〇〇〇人、都心部では一万―二万人を越える町も少くなく、住宅都市としてはすでに過密住地化の傾向が少くない。



第26図 人口変遷図（市勢要覽）

から戦後にかけて宅地が山林・原野にまで広がると、

最近では宅地総面積は五五〇ヘクタールとなり、その宅地

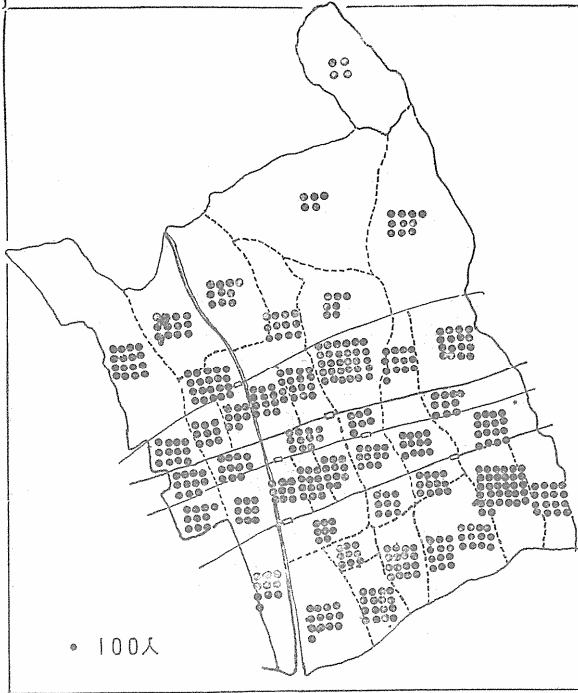
耕地の減少と宅地の増加 芦屋市域一帯はもともと農業を中心に漁業などを兼業する人達が住んでいた処で、明治中期に五〇〇余町歩の耕地があり、水田耕作が主として営まれていた。ところが当地域一帯が住宅地となるにつれて耕地は減少を始めた。すなわち耕地は、明治末年に三五〇町歩、大正末年に二二〇町歩、昭和一〇年ごろには七〇町歩という具合に減少した。戦後はこの傾向が一層ひどくなり、今では宮川の沖積地を中心に数十町歩の耕地が残存するばかりであり、しかもそれらの耕地の半ばはいわば畑地や荒地で宅地移行直前の姿を示すものが多い。

一方耕地の減少はそのまま宅地の増加となつて現われ、明治の末年頃三〇―四〇ヘクタールに留っていた宅地は、大正末年には一七二ヘクタール、昭和七年には二七六ヘクタールという具合に増加した。今次大戦の戦前

の大半が住宅建築物でおおわれ、昔の農漁村は文字通り住宅都市に面目を一新した。

住宅街の形成

芦屋市一帯は地形や地質から見ても分る通り、水害の恐れのない土地であった。こんな関係



第27図 町別人口分布図
—昭和30年10月現在—

で古い集落は、洪水や高潮等の自然の災害が少い上、飲料水が得やすい芦屋川の溪口に近い山麓台地末端、あるいは西国街道沿いの打出の低位台地その他にあった。旧藩時代に海岸の低湿地や芦屋川の自然堤防附近が一部開発された。がしかし、主要生活舞台には大きい変化がみられなかった。

ところが、明治から大正・昭和となつて土地利用の目的が変わると、当市一帯の自然は大都市近郊の住宅地として最良の条件を備えていることが分り、交通機関

の整備と共に急激に住宅地化されることになった。すなわち、阪神電鉄・国鉄の開通で、同所属駅に近い芦屋川河畔にまず天井川の風景を巧みにとり入れた高級住宅街が形成され、つづく阪急電鉄の開通で山手台地末端の傾

斜地を利用した山荘住宅街が形成された。昭和に入って剣谷国有林の一部の解放その他を待つて土地会社や電鉄会社により山麓台地に六麓荘、松風山荘その他の住宅街が形成されると、宏荘住宅都市芦屋の名声は全国的に高まってきた。と同時に当地の住宅地は、臨海地域から海拔高度二五〇米の北部山麓台地の山林・原野地域までの広がりをみせることになった。

変貌する住宅街

芦屋市は前述の通り、阪神両都市の住宅地になって以来、この地のもっている土地資源を巧

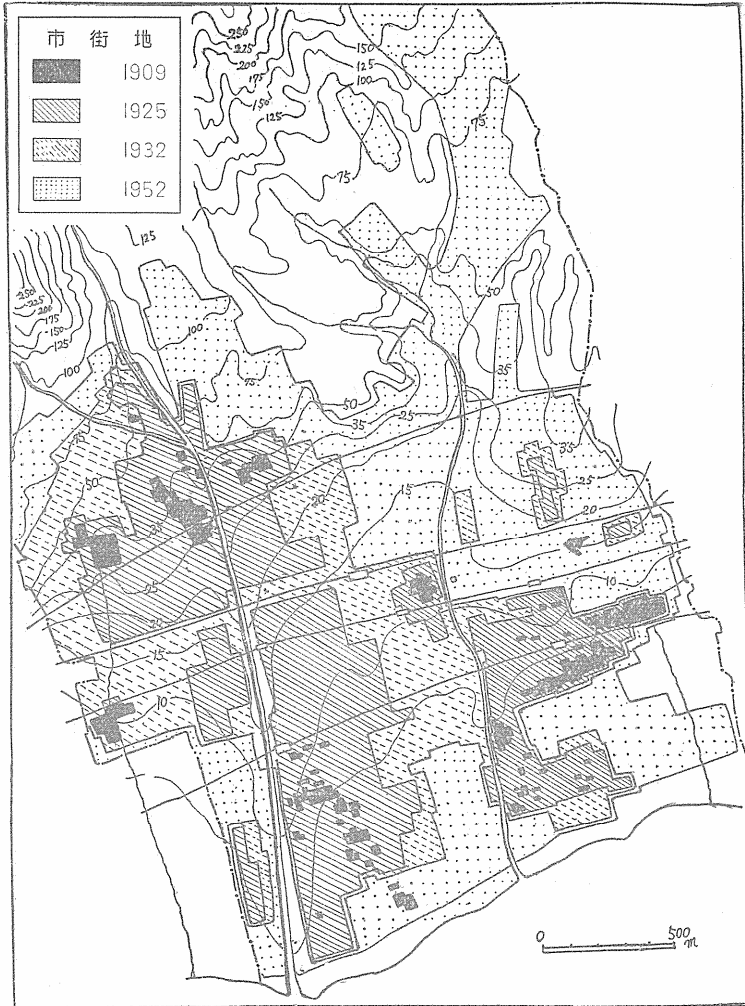
みに利用して戦前は京浜の鎌倉とならび、阪神間の豊中市と共に阪神間屈指の高級住宅都市になった。^{註(1)(2)}しかし昭和二〇年六月および八月の戦災で罹災人口一八、〇〇〇人、罹災戸数三、〇〇〇余戸、すなわち全人口や住宅の三〇―四〇%が罹災するというほどの甚大な被害を受け、それがため都心部は一面の焼土に化した。そしてその結果は、他の多くの戦災都市と同様に、戦後住宅都市の外観や構造に大きい変化が現われることになった。すなわち都心部の罹災地には、戦後の経済事情の窮迫を示すかの如き戦前見られなかった応急住宅が現われ始めたし、またこれまで交通事情その他の関係から住宅化の遅れてきた宮川流域一帯が戦後住宅地としての地位を高めることになった。しかし戦後住宅地化された地域は、戦災地と同様戦前にみられなかった規格の一定した規模の小さい公営の集団住宅、あるいは高層アパートが多く、当市の特色であった宏荘住宅とは比較にならぬ殺風景なものであり、非戦災住宅地区のそれとは著しい対照を示すことになった。

註 (1) 兵庫県 復興誌 頁五―一四 一九五〇年

(2) 前掲書 芦屋市史年表 頁八九

地域の分化

以上の通り当市では住宅地の拡大、戦災などで住宅街の構造に分化がみられることになると同時



第28図 海拔高度と市街地発達状況

第33表 海拔高度よりみた市街地発達状況

	高 距	市 域 面 積 km ² (%)	市 街 地 面 積 (km ²) (%)			
			1919	1925	1932	1952
			面 積(%)	面 積(%)	面 積(%)	面 積(%)
A	0~35m	3.97(25.1)	0.25(83.3)	1.43(83.2)	2.32(84.0)	3.85(70.1)
B	35~50	1.04(6.6)	0.05(16.7)	0.23(13.6)	0.26(9.6)	0.52(9.5)
C	50~100	1.46(9.2)	0 (0)	0.06(3.2)	0.12(4.3)	0.73(13.3)
D	100~150	0.82(5.2)	0 (0)	0 (0)	0.06(2.1)	0.23(4.2)
E	150~200	0.69(4.4)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0.16(2.1)
F	200~500	5.02(31.8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
G	500~900	2.78(17.7)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
計	0~900	15.78(100.0)	0.3 (100.0)	1.72(100.0)	2.76(100.0)	5.49(100.0)

に、他方では各国鉄・電鉄駅前や都心部に小規模ながらも商店街が形成されるようになった。さらに、東神戸の工業地域に近い津知一帯に零細な家内工業が行われるようになった。また市役所、郵便局その他の官公衛施設も相前後して芦屋川の自然堤防上に集まるという具合に、住宅都市化とともに二心地域の分化が行われて現在にいたっている。

(二) 都市の形態

市街地と海拔高度 現在の芦屋市の市街地は海岸から海拔高度二五〇米附近に広がっていて急坂都市の傾向が強い。しかし明治の末期、すなわち当市が近代住宅都市となる以前は、集落の八〇%余は海拔高度三〇—四〇米以下の芦屋川、宮川の扇状地や打出一帯の低い台地に偏在し、残りの二〇%の集落も海拔四〇—五〇米前後の山麓台地末端に集まり、平地都市の色彩がまだ強かった。また当市が阪神両大都市の住宅都市として知られ始めた大正末期でも、当時主として住宅地化されたところは芦屋川畔か、北部山麓台地末端のいずれかであったから当時でもなお平地都市の域をあまり出ていなかった。

第34表 地表傾斜より見た市街地発達状況

都市の形態

	地表傾斜	総面積	1902	1925	1932	1952
			市街地			
	度(%)	km ² (%)	km ² (%)	km ² (%)	km ² (%)	km ² (%)
A	0 (0)	3.16(20.0)	0.25(83.3)	1.00(58.0)	1.64(58.8)	3.01(54.8)
B	2.5(5)以下	2.24(14.2)	0.05(16.7)	0.61(35.5)	0.94(34.0)	1.84(33.4)
C	5.4(10) "	1.43(9.1)	0 (0)	0.07(3.9)	0.12(4.8)	0.47(8.6)
D	8.3(15) "	1.85(11.7)	0 (0)	0.03(1.9)	0.04(1.6)	0.15(2.8)
E	11.2(20) "	1.85(11.7)	0 (0)	0.01(0.7)	0.02(0.8)	0.02(0.4)
F	14.0(25) "	1.79(11.3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
G	14.0(25)以上	3.46(22.0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	計	15.73(100.0)	0.3(100.0)	1.72 (100.0)	2.76 (100.0)	5.49 (100.0)

しかし、昭和に入つて、土地会社その他による住宅地造成が流行し、六麓荘・松風山荘等の山荘住宅の経営が始まると、市街地の高度限界は遂に海拔二五〇米の山麓台地の北限に広がるようになってきたし、戦後宮川上流の朝日ヶ丘、東山一帯の台地の住宅地化が盛んになり市街地の三分の一が山麓台地に移ると共に、山地急坂都市の傾向がいよいよ強くなつてきた。

市街地と傾斜 芦屋市街地の高度が大きくなると同時に現われたのが市街地の傾斜の変化である。すなわち、農漁村時代、地表傾斜五%以下の地域に広がっていた集落も、当市が住宅都市となるにつれて地表傾斜一〇—一五%の住宅地も珍らしくなくなつてきたし、大正から昭和にかけて山麓台地末端から山麓台地の北限に市街地が広がると、地表傾斜一〇%以上の急傾斜市街地が全体の一〇%余の地域を占め、住宅地の傾斜の限界ともいふべき二〇—三〇%以上の急傾斜市街地すら見受けられるようになった。

参考文献

- (1) 前掲書 急坂都市に於ける市街地の傾斜とその限界—急坂都市芦屋の場合—

戦前の都市計画

芦屋市街地は前述の通りに地形的に極めて変化の多いところに発達したが、神戸市の場合と同様、住宅都市化にさきだつて在住地主の手で土地の区画整理が進められ、市街地の形態が面目を一新することになった。すなわち大正末期になつて当市一帯の住宅地化が始まると、まず地元の地主の集まりである一二の耕地整理組合の手で、阪急電鉄軌道以南の低地に整然たる道路網が造成せられた。と同時に、芦屋川の改修も進められ、都心部の面目は一新することになった。昭和になつて同三年には山荘の住宅地分譲などを契機に、山麓一帯の住宅地造成の機運が熟すると、四年には六麓荘・山芦屋、五年に岩園町一帯の区画整理が進められた。さらに一〇年には朝日ヶ丘、同一五年には三条町という具合に区画整理区域は六甲山地近くまで広がった。

註 (1) 奥中喜代一 神戸市の発展過程と今後の方法 本邦都市発達の動向と諸問題 上 頁二七—一四三 一九四〇年

戦後の都市計画

芦屋市の都市計画はその当初は西宮の都市計画の一環としてすすめられたのであったが、市制施行と同時に当市独自のものに切り替えられた。しかしそのような新都市計画は太平洋戦争の勃発で中絶をよぎなくされたばかりか、戦災で都心部の五・九万坪が罹災した。その結果生まれたのが戦後の復興計画である。戦後の戦災都市復興計画では、戦後の交通量の激増に伴う旧耕地整理区画の行きづまりの改善に重点が置かれ、幅五〇米の東西型の新阪神国道浜手幹線、幅二七米の山手幹線を始め、これらの東西型の幹線を結ぶ幅二〇米の南北型の副幹線、山手循環街道が計画され、旧碁盤状の街路網も面目を一新しようとしている。

参考文献

- (1) 前掲書 昭和三〇年芦屋市勢要覧 頁二八—三二 その他

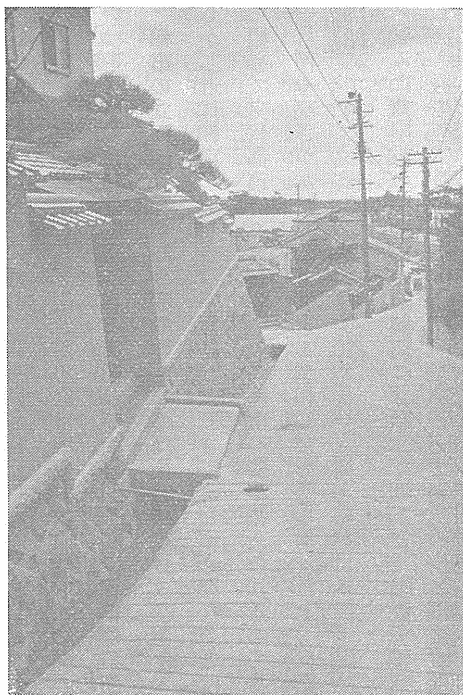
一方、新街路計画と共に戦後の都市計画で注目されるのは新緑地公園計画である。すなわち、既設の芦屋川畔の芦屋河川公園に加うるに浜側の海浜公園を始め、市内各地に宮川・打出・宮塚・川西・月若・松ノ内・山手および市民運動場の近隣公園の整備が始められたのも、戦後の都市計画の特色である。また市内各地に散在する旧墓地に代る戦後の宮川上流の芦屋市霊園の建設など戦後の都市計画として注目すべき構想であろう。

交通施設の系統 芦屋市は地形の関係で幅四料の市街地に北から阪急・国鉄・国道及び阪神電鉄等の高速度あるいは路面電車が東西に通じ、阪神間諸都市のなかでも最も交通至便な都市である。また阪急芦屋川駅を起点に浜芦屋・西宮苦楽園を結ぶ南北あるいは東西型のバスを始め都心部循環バスも最近登場し、駅の位置の偏在あるいは東西型の高速度電車による市内及び市外相互間の連絡の不倫を補うようになった。

都市の立面形 都市の平面的な美しさは街路・緑地・公園その他の都市施設の合理的な配置で決定されよう。しかし近代都市の美しさは平面的な美しさに劣らず必要なことは立面的な美しさであり、両者が相互に結びついて始めて文化都市にふさわしい美観都市の姿が整えられるのである。ところで都市の立体的な美しさは、建築物の容積や高さがあたりの自然景と調和した形態を取った上、自然の立面的な変化の欠点が建造物の変化で補われて始めて求められることであろう。

試みに芦屋市の建築物を階層別に分類してみると、戦災で建築物の階層が一般に低下したことにもよるであろうが、平家建の建物がその五二・六%を占め、二階建の建物（四六・四%）を上廻り、三階建の建物となると全体の〇・五%を占めるに過ぎない。また建築物の一階床面積に対する延面積の割合を求めると、戦後急激に高層

住宅の比率が高くなった打出大東町の如く延面積が床面積の四倍以上に達する町すら現われるようになったが、



第29図 山手傾斜地の住宅街

化によることよりも地形的変化と、これを巧みに取り入れた一、二階の建物の織りなす立面的な変化からもたらされていることになる。またそうであるとするならば、今後の当市街地の立面的な美しさを一層高めるために、より一層造形的な工夫をこらされることが必要であり、あたりの自然を無視して乱立し始めた戦後の集合住宅地区に見られるような住宅街の造成方法は当市の使命から考えて今後再検討されるべきであろう。

参考文献

その他の延面積の比率が大きい三条南・岩園・山芦屋・打出小槌・宮川の各町でも建築物延面積は一階床面積の一・五倍程度である。また上宮川・打出翠ヶ丘・宮塚の各町に至っては、建築物延面積は床面積の一・二倍を下廻る程で、全町平均建築物延面積は床面積の一・三六倍にすぎず、いづれにしても平面住宅都市の傾向が現在なお強い。こうみると当市の市街地景観の立面的な美しさも、建築物の高さや容積的な変

(1)昭和二八年芦屋市住宅調査報告書その他

(三) 産業の構造

農業の衰微 芦屋市はもともと農漁村集落の一つであったし、明治の終りから大正にかけて数百戸の農家があつて二〇〇―三〇〇町の耕地を耕していたし、専業漁家も数戸を数えた。ところが大正から昭和にかけての住宅都市化による耕地の減少に呼応して農家の減少が目立ってきた。すなわち、昭和の初めに四〇〇戸を数えた農家は、戦後には一〇〇余戸に激減したばかりか、残存農家の五〇―六〇%が第二種兼業農家であり、一戸当りの平均耕地面積は二反余という有様で、当市の農業的機能はすでに潰滅してしまつたと云つてよい。

零細な水産業 大阪湾を前面に控えた芦屋の砂浜海岸を利用して沿岸漁業が早くから営まれていたことは古歌にもしるされている通りである。しかし近代的な漁業をいとなむに好都合の入江もないままに二〇余戸の漁家が無動力船を主として細々漁業を営んでいる程度であり、昭和二五年のジェーン台風の被害も大きかったので、当市の海岸は漁場としてよりも阪神在住の釣フানেরリクリエーション地に一転する傾向が強い。

零細な小売業 芦屋市は旧農漁村から近代的住宅都市として発展すると共に市民も急激に増加し、それに伴う市民の消費生活面が多方面に広がった。しかし、当市が阪神の住宅都市として発達した関係で、市民の消費生活も主として母市で行われがちで、人口にくらべて市内の商業的機能の発達には常に阻害されがちであった。また市民の娯楽生活も母市を通じて行われがちであつたから、観光娯楽施設をとりまくいわゆる盛り場的な商業活動も

遂に芽生える余地も見当らなかつた。すなわち、阪神・国鉄・国道・阪急の諸鉄道の駅前やら都心部を南北に結ぶ通称本通、三八通を中心に、約八〇〇戸の商店が最近商店連合会を組織し、鈴蘭燈街、アーケード街などを作り商業の振興に努力しているものの、規模といい取扱い品目といい取り立てていうほどのものがない。いいかえると都心商店街をみても分る通り、店舗は復興建築というハンディキャップもあるうが、その多くは住宅併用或は改造式のものである。また店頭の商品も一般或は生鮮食料品、日用雑貨品が多く、その大部分は市民の最小限の需要をみたす日常生活必需品でその占める割合は極めて大きく、卸売、専門店などは少ない。

小規模の工業 商業が不振であると同時に工業もふるわない。また土地がら当市の工業の将来を期待することも不可能である。すなわち工業も小企業者がその大部分を占め、四〇余の工場を数えても、それらの工業従業者は数百人にすぎず、製品も脱脂綿・理髪用櫛・安全剃刀替刃・医薬・清涼飲料水・セメント瓦及び陶器等のいわば雑貨類である。しかもその多くの工業は当市の環境に自然芽生えたものというより東神戸工業地帯の影響を受けて発達したものと云つてよい。

参考文献

- (1) 前掲書 芦屋国際文化住宅都市建設計画書 中 頁九―一八
- (2) 前掲書 昭和三〇年芦屋市勢要覧 頁一八

(四) 人口の構造

自然動態と社会動態

芦屋市の人口の自然的累年動態をまづみると、終戦後間もなかつた昭和二二年ごろの人口一、〇〇〇人に対する出生人口は二九・五人、死亡人口は一〇・二人、差引一九・三人の増加をみた。ところが、戦後の医学の進歩、産児制限思想の普及とともに出生・死亡人口は減少の一途をたどり、同二六年には人口一、〇〇〇人に対する出生人口は一五・一人、死亡人口は六・二人、差引自然増加人口は八・九人という具合に激減した。

終戦後年月が経過するにつれ芦屋市の人口の自然増加率は減少の一途をたどり始めたのに対し、流入超過人口は増加の一途を示した。その結果、当市の累年の増加人口のなかで占める社会的人口の割合は戦前のそれを上廻ってきた。すなわち、戦後における年平均増加人口一、〇〇〇人について自然的・社会的増加人口の割合をみると、終戦後二、三年間における増加人口のうち社会的増加人口はその七〇%前後で、いわば戦前なみであった。ところがその後新転入者や母市からの再疎開人口が激増したのに対し、人口の自己再生産能率は低下したため社会的増加人口の最近の割合は、年間増加人口の八〇—九〇%を占めるといふ異常さを示し、母市大阪市や神戸市の増加人口中に占める社会的増加人口の割合をも遙かに上廻ってきた。

性比別人口 一般に戦前都市と農村人口の性比別人口の割合をくらべると、生産都市では男子人口が女子人口を上廻り、農村では逆に女子人口が男子人口を上廻りがちであった。また、戦後になると、戦争による多数の男子人口の喪失と敗戦後の政治・経済・社会事情の激変で、戦前男子人口の割合が多かつた都市でさえ、女子人口が男子人口を上廻ることさえ珍らしくなくなった。

しかしながら、早くから高級住宅都市として知られてきた芦屋市では、戦前市内の多数の宏荘住宅が多くの女子使用人を吸収した関係で、一般都市とはちがって常に女子人口が男子人口を七―八%上廻っていた。とりわけ二〇才前後の女子人口となると、男子人口を二〇%余も上廻るという状態で、性比別の人口構造では繊維工業都市が観光都市的傾向が強かった。

一方、戦後になると、これまで多数の女子使用人を吸収してきた富豪階級が、敗戦による経済界の混乱で多く没落した上、新憲法による女性の解放などで家事使用人としての女性の数が著しく減少した。その結果、女子人口は戦前にくらべて減少の傾向が強くなってきたところへ、没落した富豪の宏荘住宅が銀行・会社・工場等の独身寮に転用されるといふ新事態さえ現われ始めた。こんな関係で、これまた一般都市とは逆行して昭和二三年ごろから男子人口が女子人口を上廻ることになった。とりわけ最近の二〇才前後の男子人口は女子人口を七―八%上廻るといふ戦前のそれとは全く逆の現象が強くなった。従って戦後の芦屋市の性比別人口構造では、戦前とは一変して川崎・宇部等の重工業都市の性比別人口構造と類似することにもなった。

年齢別人口 敗戦による混乱が一応治まった昭和二五年一〇月現在の芦屋市の人口の年齢別構造をみると、一五―五九才までのいわゆる生産年齢人口が全体の六五・三%を占めて特に多く、一四才以下の低年齢不生産年齢人口（二八・〇%）がこれに次ぎ、六〇才以上の高年齢不生産年齢人口（六・七%）の割合が特に少いことになる。また、生産年齢人口のなかでも、二〇―二四才の男女青年層人口並びに二五―二九才までの男子青年層人口が他の都市にくらべて著しく多い。

従つて生産年齢人口の割合では、全国都市平均（六〇・四％）とはもちろん、類似の機能をもつ豊中市（六一・七％）のそれを上廻り、英国（六五・〇％）のそれに近い。また、低年齢不生産人口の割合では本邦都市人口の平均（三三・〇％）を下廻り、むしろ米国やオーストラリア（二七・〇％）のそれに近く、年齢別人口の構成では青年都市的な色彩が強い。いわば間接的には本市の人達の生活水準を高める結果ともなっている。しかし戦後の年月の経過とともに人口の自己再生産能力の低下が目立ってきていることは当市の人口の年齢構成の将来からみて必ずしも樂觀すべき状態であるということとはできない。

出生地別人口 芦屋市民の約半ばを占めていた戦前昭和一三年度の寄留市民の本籍地の府県別割合をみると、地元兵庫（二二・三％）および隣接府県大阪（二二・一％）が絶対多数を占め、以下東京（五％）・岡山（五％）・京都（三％）・滋賀・広島・三重・香川・徳島・愛媛等の諸県の順であつた。一方、戦後昭和二五年一〇月現在市民の七〇％余を占めていた市外出生者の府県別の割合をみると、地元の兵庫（三三・〇％）や隣接府県大阪（二二・一％）がその半ば以上を占め、以下東京（四％）・岡山（三％）・広島（三％）・鹿児島（二％）・愛媛・香川・徳島及び和歌山等の順になっている。すなわち全国各都市との人口の交流がはげしい東京都を別とすると、当市の人口は、戦前から地元並びに距離的に近い西南日本各府県の出身者で占められてきたが、一般都市の場合と同様戦後は地元府県との関係が、一層緊密化した。

産業別人口 芦屋市民の産業別人口構成をみると、大正の初期では有業人口の半ば以上を農業人口を主とする第一次産業人口が占め、大正中期に入つても、有業人口の三分の一以上は第一次産業人口が占めていた。ところ

が、大正末期を契機に阪神両都市の住宅地となるにつれ第一次産業人口は急激に減少し始め、大都市よりの転入者が激増するにつれて商工業その他を主とする第二、三次産業人口の比率が急激に大きくなった。第二次世界大戦前後から京浜の住宅都市鎌倉と同様、有業者人口の三五%前後は第二次産業人口で、同じく六〇%前後は第三次産業人口が占め、第一次産業人口は殆んど姿を消すに至った。この点同様の機能を持つているとはいいながら、現在なお第一次産業人口をかなりかかえている大阪府下の豊中市などは若干趣きが違う、産業別の人口の構成では京浜地方の鎌倉市に近い。

参考文献

- (1) 稲見悦治 芦屋市の横顔 デルタ 二巻八号 一九三八年
- (2) 同 衛星住宅都市芦屋の地域構造 都市問題研究 七巻二号 一九五〇年

(五) 住宅事情の実態

芦屋市は自然環境の良さと、大阪・神戸という西日本の二大都市にほど近い交通の便利さと相まって、わが国随一の高級住宅都市として戦前から有名であった。しかし戦災による甚大な被害並びに敗戦後の経済事情の激変などの影響を受けて、住宅都市の外観ならびにその内容に大きい変化が現われてきた。以下それらの事情を多方面からも分析して当市の住宅事情の実態を眺めてみよう。

建築敷地面積と建築面積

芦屋市の市域と市街地との割合を最近の調査でみると、市街地は市域の約三六%に

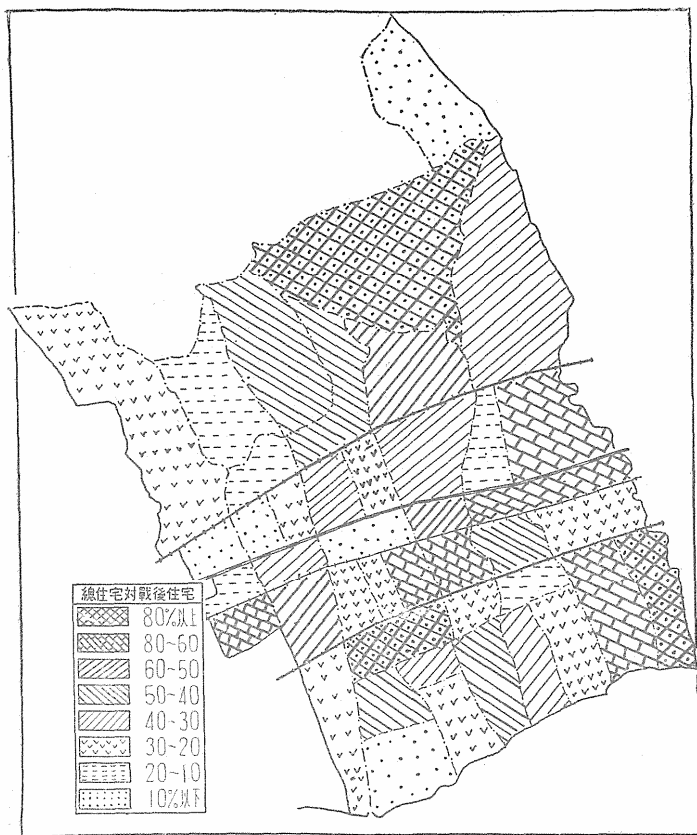
当り、建築敷地面積は市街地のさらに四九%に止り、世評の通り環境衛生のよい住宅都市といふことができる。また建築物敷地面積に対する建築物一階床面積の割合、すなわち建築率は約二三・九%である。もちろん都心或は駅前商業地区の大塚・西山、官公衛地区の公光、応急住宅地区の上宮川及び一般住宅地区の業平・清水・打出南宮町の如く、せまい敷地に建物がたてこんで建蔽率が三〇%を上廻る町も必ずしも少くない。しかし農業地区の岩園町などを別としても山手住宅街の六麓荘・朝日ヶ丘・山芦屋、打出台地の翠ヶ丘・楠、芦屋川畔から浜手にかけて川西・平田・浜芦屋の各町の如く、現在なお建蔽率が二〇%を下廻るといふ住宅敷地にかなり大きい余裕をもち、市街地全体から見た場合とは別に個々の住宅の環境衛生の極めて良好な町も少くない。

住宅の建て方・種類及び構造

芦屋市の住宅を建て方別にみると、一戸建て住宅がその八九%を占め、長屋建て住宅（一〇%）、アパートその他（二%）は極めて少い。また住宅を種類別にみると専用住宅がその八六%を占め、併用住宅（二二%）、寄宿舎・下宿、非住宅（一%）の割合が極めて少い。従つて一戸建あるいは専用住宅率では鎌倉・豊中市のそれを上廻る状態で、高級住宅都市らしい形態がこの方面にもよく現われている。一方住宅を構造別に見ると、木造瓦ぶき住宅（八五%）の比率が極めて高く、耐火構造住宅（五%）の割合が極めて小さい点などは豊中市の場合とよく似ている。しかし木造トタンぶきその他、壊舎・仮小屋式応急住宅（一四%）もかなり見受けられ、戦災後八、九年の年月が経過した昭和二八年になつても当市の住宅は必ずしも戦災前なみの構造を示すに至っていないのは残念である。

建築時期別住宅

芦屋市は今次大戦で全住宅の四〇%、すなわち三、〇〇〇余戸を失つた。また市民の重要職



第30図 町別住宅の復興状況(1953)

場である母市大阪や神戸の経済的機能も壊滅的な打撃を受けた。こんな関係で、祖先代々の土着人口の比率の大

きい地方戦災都市に
 くらべて、住宅の復
 興が遅れた。すなわ
 ち、昭和二三年の調
 べでは、戦後竣功住
 宅は九三〇余戸に留
 まる状態であり、戦
 後住宅は全体の一四
 %を占める程度であ
 った。ところが、そ
 の後母市の職場の復
 興にともなう経済生
 活の好転化、とりわ
 け、昭和二五年の朝
 鮮事変を契機に、母

市大阪や神戸にいわゆる特需景気が始まると、その影響で当市の住宅復興建築も軌道にのりだした。その結果昭和二八年には戦後住宅は全住宅の三七・二%にも上り、宏荘住宅都市芦屋の景観は年を追って変貌することになった。すなわち、戦災をまぬがれ戦前のままの宏荘住宅街の面影の残る山手一帯、戦災で住宅景観が一変した都心部戦災住宅地区、打出一帯の戦後の集団住宅地区という具合で、住宅都市芦屋の住宅の地域差が最近とくに大きくなった。

住宅の腐朽破損の度合 戦災を受けた優良住宅にかわって戦後粗悪住宅の比重がませばそれだけ住宅の質が低下したことになる。ところで芦屋市の最近の住宅の破損、腐朽の度合を見ると、戦災住宅の復興が遅れたことがむしろ幸いして要修理住宅（一八・九%）、要大修理住宅（〇・五%）の割合は全体の二〇%以下に留まっている。従つて要修理住宅あるいは修理不可能な住宅が全体の四〇%前後に上っている首都東京あるいは原爆都市広島その他にくらべて当市の住宅の腐朽、破損度は比較的軽微であるといつてよい。

住宅及び宅地の所有関係 戦前大都市やその周りの衛星住宅都市の勤労者の住宅の七〇%は借家であつたといわれている。また勤労者の持家でも借地であつた場合が少くなかつた。ところが、芦屋市の場合、母市の過密住宅地の不健康地をさらつて住居をこの地に移す人達が相次いだため発達した都市である。従つて大都市やその他の周辺の都市の場合と違つて当市では戦前から持家並びに自己宅地率がかなり高かつたわけである。一方戦後になると、これまで借家率が大きかつた都市でも敗戦後の社会経済事情の激変で借家・借地が持家・自己宅地に移行されるものが多くなつてきたほどであるから、当市ではこの傾向が一層助長されたことと思われる。また戦後

住宅は公営・給与住宅を別とすると民間住宅は主として持家であり、この方面からも都市では持家率が大きくなつたはずである。試みに昭和二三年現在の当市の持家をみると四五・九%を占め、鎌倉市（五三・二%）ほど高くなかつたが、競合都市豊中（四六・〇%）に劣らず当時すでにかなり高かつた。

一方戦後の特色である公営・給与住宅も当市にどんどん建築されたので、その割合は昭和二三年に全住宅の四・五%、同二五年には八・二%、さらに二八年には一四・六%という具合に激増したが、同時に持家の割合も増加して二五年には全住宅の半ば以上を占めてきたのが注目される。二五年以後になると持家の借地が自己宅地に切り替えられるという状態で、二八年ごろには戦前かなり多かつた借家も全体の三五%に減少してしまつた。こうして戦災を契機として当市の住宅の中で公営・給与住宅あるいは小規模の持家住宅の比率が高くなつてくればくるほど、戦前全国的に有名であつた当市の高級住宅的な面影は追々失われることになつたのも、自然のなりゆきで致し方ないことであらう。

一 住宅の畳数と部屋数 当市の住宅の規模を一住宅当りの畳数で見ると、残存戦前住宅のそれは二七・八畳で高級住宅都市の名にふさわしく、戦前は大住宅の比率が高かつた。ところが資金・資材の面の窮迫から罹災住宅跡に建てられた戦後の民間住宅の規模は一律に小さくなつてきたし、住宅対策として戦後新たに企画に上つてきた公営・給与住宅の規模は畳数一〇畳内外の小住宅がむしろ普通になつてきた。こんな事情で当市の一住宅当りの畳数は、昭和二三年には二四・七畳、二八年には二三・七畳という具合に戦後住宅の割合が大きくなるにつれその規模が小さくなり、公営集団住宅地となつてきた宮川以東などの如く、一住宅当りの平均畳数一二畳未満の

町さえ現われることになった。しかし、それでも全市の平均となると同様の機能を持っている鎌倉・藤沢・豊中（一九・〇畳）等にくらべ一住宅の畳数はかなり大きく高級住宅都市的色彩が今なお強い。

戦後の住宅の平均規模の縮小はそのまま一住宅の部屋数の減少となってきた。すなわち一住宅の平均畳数三〇畳余の山手住宅地区ではその部屋数六―七にも及んでいるが、江尻川の低湿地の集合住宅地区の如く一住宅の部屋数三以下の地区も現われ、全住宅の平均部屋数は四・五で、その点では一応豊中・鎌倉市より多いが、一世帯当りの平均人口とくらべるとそれを若干上廻る程度に過ぎなくなってきた。

住宅と世帯との関係 戦前における芦屋市の住宅総数は約七、五〇〇余戸、これに対して世帯数は八、一〇〇余世帯であったから、当時すでに両者の均衡は若干破られていた。そして戦災で住宅はその四〇%近くを失ったにもかかわらず戦時中減少した世帯はその一五%に留まったので、終戦直後の残留世帯は残存住宅の三四%を上廻ることになり、一般戦災都市と同様、終戦直後の住宅事情は極度に悪化した。ところが戦後になると、当市の世帯総数は終戦後二、三年で早くも戦前の世帯数に復元したのみか、最近ではさらに戦前のそれを六〇―七〇%も上廻る結果になった。一方、住宅ではその規模を不問にしても、終戦後五か年経過してようやく戦前のそれを上廻ったのに過ぎず、最近になっても二〇―三〇%を上廻ったのに過ぎず、戦災で生じた世帯と住宅の不均衡は住宅の絶対数に限ってみても容易に是正されそうもない。

同居世帯の割合 芦屋市は他の戦災衛星住宅都市と同様、戦災で住宅数と世帯数に著しい不均衡が現われた。その結果、終戦直後の同居世帯は全体の四〇%に上ったと推定される。しかし終戦後年月が経過し、社会経済事

情が安定するにつれ、日本家屋の同居生活に堪えかねた世帯が同居生活を解消して行ったため、世帯別同居率は昭和二五年には一九・四%、さらに二八年には一〇・八%という具合に漸次減少した。こうして世帯別同居率が減少してきたのに対し、個人を単位とした同居率は漸増してきた。すなわち当市の同居人口数は昭和二五年には全人口の四・四%に過ぎなかったが、二八年には八・四%となつてきているし、この傾向は今後一層大きくなるのではなからうか。

住宅の規模と同居世帯との関係

一般に同居世帯率の大小は住宅数の不足率あるいは住宅の規模に左右されようと考えられる。ところで当市の場合、町別住宅の規模と同居世帯率との関係を昭和二八年の資料でみると、同居世帯率が最も大きい地区は一住宅当りの平均畳数二〇―三〇畳のいわゆる打出台地から都心部にかけての中級住宅地区であつて、一住宅当りの平均畳数三〇―四〇畳以上に及ぶ山手の宏荘住宅地区が、同じく二〇畳以下の宮川流域以東の戦後の集団住宅地区と並んで同居世帯率が最も小さいことを示している。宏荘住宅地区の同居率の小さい理由としては六麓荘地区の如く交通事情を無視することのできない場合もあるが、その理由の多くはそれらの宏荘住宅の多くがたとえ間取が多くても日本家屋独特の構造に災されて同居世帯を受入れがたい構造をもっている上、宏荘住宅居住者にありがちな格式ばった生活様式が同居生活希望世帯を敬遠するに至つたためとも考えられる。

居住者一人当りの畳数

居住者一人当りの畳数から芦屋市の住宅事情を調べると、昭和二三年は四・五畳、同二八年は四・八畳で、農村的性格を多分に含んでいる地方都市を別とすると、本邦都市随一の広さをもっている

し、町別一人当りの畳数の平均七―八畳に上る恵まれた地域も必ずしも珍らしくない。しかし戦後住宅の比重が増すにつれ、町別一人当りの畳数三畳以下という、云わば動物的な生活を余儀なくされている地区も、追々現われ始めた。従って一応文化生活を営むに足る、一人当りの畳数五畳以上の町となると、市内全町の半ばにも達しかねる状態で、高級住宅都市として知られてきた当市の住宅事情の前途は、必ずしも樂觀を許されない状態である。

参考文献

- (1) 建設省 昭和二三年住宅調査
- (2) 総理府統計局 昭和二八年住宅統計調査報告
- (3) 建設省 明日の住宅と都市 頁七八―八七 一九四九年
- (4) 昭和二八年芦屋市住宅調査報告書

(六) 地域の構造と地域性

市域と市街地 芦屋市の最近の市街地面積は五六四ヘクタールである。従って市域からみるとその三六%がようやく市街地化された程度に過ぎない。ところで、町別にみると、都心部を中心とする七〇―八〇%の町が完全に市街地化され、市街地化のおくれている町は芦屋川・宮川扇状地からその以北に広がる交通不便な急傾斜地を擁する三条・山芦屋・山手・東山の各町あるいは宮川・江尻川沿いの低湿地に広がる岩園・打出大東・打出南宮の各町を数えるにすぎない。従って交通施設の現状、非市街地附近の地形その他を基礎として考えると、当市の

利用可能地は一応市街地化されたものとみてよい。

地域の構成とその割合

芦屋市域は大別すると芦屋川河畔の精道・公光町からなる官公衙地区、その東の旧藩政時代の茶屋集落の名残りを町名に留めている茶屋・大榎町一帯の商業地区、東神戸に近い津知の準工業地区、宮川上流の岩園の農業地区、芦屋川水源地一帯の奥山の公共地区及び全市に広がる住宅地区に大別されている。

また住宅地区は北部山麓台地の六麓荘・山手・山芦屋や芦屋川自然堤防上の平田の各町を一九とする高級住宅地区、江尻川沿いの打出大東町の集合住宅地区、国鉄芦屋駅南の上宮川町の応急住宅地区およびその他の一般住宅地区に細別されている。ところで、それらの地区の地域別面積の割合をみると、官公衙・商業・準工業・公共および農業の各区の面積を合わせても僅かに七六・七ヘクタールに留まり、全面積の一三・六%を占めるに過ぎない。また、用途別の建築物の割合を調べると、比較的多い公共的建築物も全体の一二・五%に留まる有様で、これに商業的建築物（七・一%）、工業的建築物（一・八%）を併わせてもわずかに全建築物の二一・四%を占めるに過ぎず、いわば純然たる住宅都市であることを示している。

一人当り市街地面積 一般に都市の環境衛生を重視する場合、市民一人当りの市街地面積は一応二〇坪以上が必要とされている。ところで、芦屋市の場合かなり人口が稠密になってきた昭和二八年現在でも三二・八坪であり、急坂都市長崎の一二坪などにくらべると約三倍で、市街地の都市化の現状からみても恵まれた環境衛生状態にあることが窺われる。

さらに、町別に見ると山手・東山・翠ヶ丘・川西・平田・精道町の如く、市民一人当りの市街地面積五〇―六

○坪にも上る良環境の住宅町も少くない。しかしその反対に商業地区大榭町などを別にしても船戸・若宮・清水・竹園その他の如く一人当りの市街地面積二〇坪以下の町も必ずしも少くないし、戦後集合住宅化の傾向が強くなった打出大東町の如きは一人当りの市街地面積八・九坪に過ぎない。すなわち罹災後の当市の環境衛生の低下並びに地域的な差異の激化は今後の文化住宅都市をめざす上の大きい障害であると思われる。

住宅建築物の地域構造

芦屋市は京浜の鎌倉、京阪神の豊中とならぶ高級住宅地として有名な都市である。と

ころが鎌倉・豊中が今次大戦中被害を受けなかったのにくらべ、当市は甚大な被害を受け、その影響は町別市民の環境衛生に現われ始めたことは前述の通りである。さらに罹災地跡に罹災した宏荘住宅にかわって戦後の小住宅の比重が増し、またこれまで未利用地であった地域に戦後の小住宅が乱立するにつれ、住宅建築物にも地域差が顕著になってきた。すなわち当市でも戦災をまぬがれた芦屋川河畔の平田・松ノ内・業平町、山麓台地の三条・山芦屋・東芦屋、臨海地域の浜芦屋の各町には、あたりの風景に調和した高い石垣や塀をめぐらした戦前のままの豪壮住宅が美しく立ち並び、高級住宅街らしい風景をそのまま現出している。しかし戦災の被害が甚大であった都心部の精道・茶屋・宮塚町あたりには広い復興街路に不似合な戦後の小住宅が数を増し、戦前の住宅地風景は一変しようとしている。また戦後公営住宅地化した打出台地一帯は戦後住宅の乱立で高級住宅地らしい自然の環境は追々その面影を失おうとしているし、さらに戦災後一層スラム街化した上宮川町、戦後集合住宅地区に指定された江尻川沿いの打出大東・南宮町あたりは、戦前に当市に見られなかった環境衛生のひどい住宅街が形成されようとしている。このようにして戦災を契機とする当市の住宅建物と、それらを取り巻く自然環境の地域

差は年々大きくなってきた。

地価別地域構造 芦屋市の地域構造を町別平均空地々価（昭和二七年の資料）で求めると、最高六、〇〇〇円内外という町は阪急芦屋川駅附近一帯の土地に限られ、同地域以南の芦屋川河畔およびその以北の山手山麓台地の各町がこれに次いで高い。芦屋川河畔にくらべると自然的環境ならびに交通施設その他に恵まれない宮川河畔及びその東は地価はかなり安く、とりわけ宮川上流の山麓台地や江尻川河畔の臨海低湿地の地価は一層安くなっている。要するに当市の地価は高速度鉄道の駅の偏在的な位置と地形に絶対的な支配を受けていることになりこれを是正するために阪急電鉄駅の増設が望ましい。

人口密度別地域の構造 地価が阪急電車軌道沿いの山手住宅街が最も高いのに対し、人口密度は都心部の国道沿いの各町が高く、北部山麓台地、東部の打出台地、西南部の芦屋川畔の自然堤防附近に向って漸次低くなっていく。すなわち都心部の二、三の町では二〇、〇〇〇人を越える人口密度も臨海地域では五、〇〇〇人、山麓台地では二、〇〇〇—三、〇〇〇人のところも少くなく、戦後住宅地化が進んでいる宮川上流の旧農業地域などでは今なお一、〇〇〇人以下の町も珍しくない。

町別平均世帯所得額別地域の構造 昭和二八年九月現在の当市の一世帯平均の所得額をみると、月平均一世帯所得四—五万円という最高を示す町は芦屋川河畔の平田・西芦屋、山手のいわゆる高級住宅街であり、東山・松ノ内・三条南・三条等山手住宅街がこれに次ぎ、残りの芦屋川沿いの町並びに都心部及び山麓住宅街の一世帯当りの平均所得額も比較的多い。一世帯当り平均所得額二万円未満という比較的低収入者の多い町は戦災の被害が

甚大であった阪神軌道以南から臨海地域にかけて一帯の町であり、応急住宅地区上宮川町などは一世帯当りの平均所得一万円にもみならず、山手住宅のそれとかなり大きいへだたりが見られるのも、民主的市民生活を営む上に大きい障害とみられる。

住宅事情別地域構造 芦屋市の町別住宅事情を市民一人当りの畳数から見ると、市民一人当りの畳数六―七畳という具合に住宅事情が最好調を示す町は、一世帯当りの平均所得額が大きい山麓台地末端あるいは芦屋川右岸の非戦災宏荘住宅街で、これに次いで好調な町が国鉄軌道以北、阪急軌道間の山手住宅街である。戦災後戦後住宅の比重が年々大きくなってきた国鉄軌道以南の罹災地になると居住者一人当りの畳数は三―四畳であり、戦前のそれにくらべて住宅事情が悪化した地域である。また居住者一人当りの畳数二―三畳といういわば寝室と食堂の分離も思うにまかせぬ町は江尻川流域の集団的な戦後住宅地域或は上宮川町の応急住宅街である。要するに芦屋川扇状三角洲の扇端の高燥地からその東南の江尻川河口の低湿地に向って住宅事情が急激に悪化している。

参考文献

- (1) 稲見悦治 衛生住宅都市芦屋の地域構造―特に罹災前後の関係― 都市問題研究 七卷二号 一九五五年

(七) 市民の生活

市民の日常の動き

芦屋市民の日常の動きを市内交通機関の乗降客数（昭和二八年度）でみると、一日平均の乗車客は二、八万人、降車客は二、七万人に上り、いずれも全市人口の半ばを上廻り、市民の日常の動きが活発

であることを示している。またそれらの乗降客数を定期及び定期外に分けてみると、定期的乗降客は全体の六二%に当り、一般地方都市の場合にくらべて定期外乗降客の割合が大きいが分り、市民の定期外の訪問、娯楽買物などによる昼間の動きが大きいことを示している。

勤労生活圏

昼間移動のはげしい芦屋市民の移動先を昭和三〇年一〇月一日現在の昼間人口調査の結果でみると、昼間の定期的流出人口（一・三万人）の移動先は大阪市ならびに同府下への移動者がその五四%を占めて特に多く、神戸市への移動者（二九%）これに次ぎ、以下西宮（九%）、尼崎（五%）各市の順になっているが、その範囲は遠く京都・奈良方面にまで及んでいる。しかし市民の主要勤労生活圏となると交通施設その他の点から一般に予想される通り阪神両巨大都市であり、この点大阪市に片よっている豊中市などはかなり趣がちがつている。そして両巨大都市と現在の当市の関係は京浜地方の衛星住宅都市鎌倉・藤沢市と両市の母市東京都や横浜市との関係にむしろ類似している。

註 (1) 大阪府昼間人口速報（昭和三〇年一〇月一日現在）

(2) 神奈川県昼間移動人口調査（昭和二六年九月一日現在）

高まった神戸市との関係

芦屋市は阪神両巨大都市というより、むしろ大阪市の住宅都市として発達してきた都市である。ところが最近における両市と当市との関係をみると、前述の通り神戸市との関係が大阪市のそれにくらべてかなり高くなってきている。しかし、このように神戸市との関係が密接になってきたのは今次大戦以後のことであるし、その原因の一つとして戦時中から戦後にかけて当市の没落富豪の宏荘住宅が神戸市内の銀行・

会社・工場勤務者の共同宿舎への多数の転用が考えられる。またその具体的な現われともみられるものが阪神打出駅の大阪・神戸への通勤・通学者の割合である。すなわち当市内各駅別、行先別通勤・通学者の割合（昭和二八年九月一日現在）をみると、国鉄芦屋駅を始め、阪急芦屋川駅、阪神芦屋駅の阪神両都市行定期乗車客の七〇%を大阪行乗車客で占められているのに対し、打出駅では逆に神戸行乗車客がその六五%を占めるようになって最近の当市民の勤労生活圏としての神戸市の役割の大きくなったことを裏書している。

消費生活圏 当市民の勤労生活圏が阪神両都市に移ったとすれば、買物・娯楽その他の消費生活圏も同時にそれらの両都市に移る結果となった。試みに当市内の商業施設をみても市民の日常の需要を賄いきれぬ弱体なものであり、しかもその業種が一般或は生鮮食品店などに独占され、衣服・洋品・雑貨・貴金属店の果たす役割は極めて小さい。また、文化・娯楽等の消費施設も殆んど見当らないと云つてよい現状であり、人口五万余人の都市に映画館はただ一館という有様で、最近流行のパチンコ店の登場の余地のない珍しい都市である。こうみてもくると、当市民の買物・娯楽等を主とした日常消費生活の最小限が当市で営まれるばかりで、大半の生活は母市その他で営まれているものと考えられるし、交通機関のスピードアップ化は今後もこの傾向を一層助長するものと思われる。

時刻別の市民の動き 芦屋市民の主要勤労並びに消費生活圏が通勤時間にして二〇―三〇分の阪神両都市に限られているし、市外各地から当市内への通勤、通学、買物その他の目的で昼間流入する人口は極めて少い。こんな事情であるから市民の時刻別動きを国鉄芦屋駅を例に取つてみると、乗客数は七時過から激増し始め、八時ご

るし、職場上の地位も極めて高いものが多い。また、当市在住者の多くは大阪・神戸その他の大都市から環境衛生のよい当地に居住地を求めて移住してきた人達が多い。その結果、市民の職業は一応郊外よりの通勤がさほど職場生活に悪影響の少ない方面に事前に限られていることになり、この点から考えても通勤による朝夕の疲労が職場生活に直接ひびく肉体的職業に従事する人達が少いことになる。そしてその反対に通勤が気分転換にもなり職場能率を高める事務系統、公務自由業あるいは時期的なゆとりの大きい金融・保険・不動産業的な職場に従事する人達が多い結果にもなっている。

市民の所得水準 芦屋市在住者はその大半が職場の地位の高いサラリーマンであり、他の一般都市在住者にくらべて平均所得が多く、消費生活水準が高い。試みに公表された市民一世帯当りの平均所得額をみると、昭和二六年に早くも年収所得一〇〇万円以上の世帯が三七〇を数え、二八年にはさらに増加して五四八世帯に上るようになった。また、月収三―四万円という高級所得世帯が一〇%を占めていた。従って一世帯当りの平均所得額は四―五万円以上の町も少くなく、年間の市民一人当りの市予算額は二万円（昭和二八年）に上り、全国諸都市中最も高額な都市ということになる。

勤労者世帯の生活水準 芦屋市民中絶対多数を占めている勤労者世帯の生活水準（昭和二八年度）をみると、市民の平均現金収入ならびに同支出額は、いずれも本邦主要二八都市の現金収入ならびに支出額よりいずれも五〇―六〇%多い。その結果、芦屋市民の家計費中に占める飲食費の割合、すなわちエンゲル係数は本邦諸都市の平均のエンゲル係数を遙かに下廻るようになっていいる。当市民の最近のエンゲル係数は国情、生活様式の相違な

どを別とする一九四四年ごろの米人のそれに近い。また当市民の経済活動ぶりは電話の普及率からも窺われる。すなわち昭和二七年末の調査によると、市民の電話加入率は人口一〇〇人当りに六・八八台で、電話加入率第二位を誇る熱海の五・八六台にくらべても極めて大きい普及率を示しているものといえよう。とりわけ市内での経済活動の不振の現状を考えると電話普及率は全国諸都市にくらべるものがないほど大きいことになる。

参考文献

- (1) 兵庫県昼間人口調査結果表 昭和三〇年一〇月一日現在
- (2) 稲見悦治 本邦都市の昼間人口の流動とその流動圏 地理学評論 二九卷七号 一九五六年
- (3) 前掲書 芦屋国際文化住宅都市建設計画書 中 頁三一―九
- (4) 芦屋市家計調査報告 芦屋市における勤労者の実態調査 一九五四年
- (5) 昭和二八年芦屋市勢要覧

芦屋市史 本編〔非売品〕

昭和三十一年一月一七日発行

編集者 魚澄惣五郎

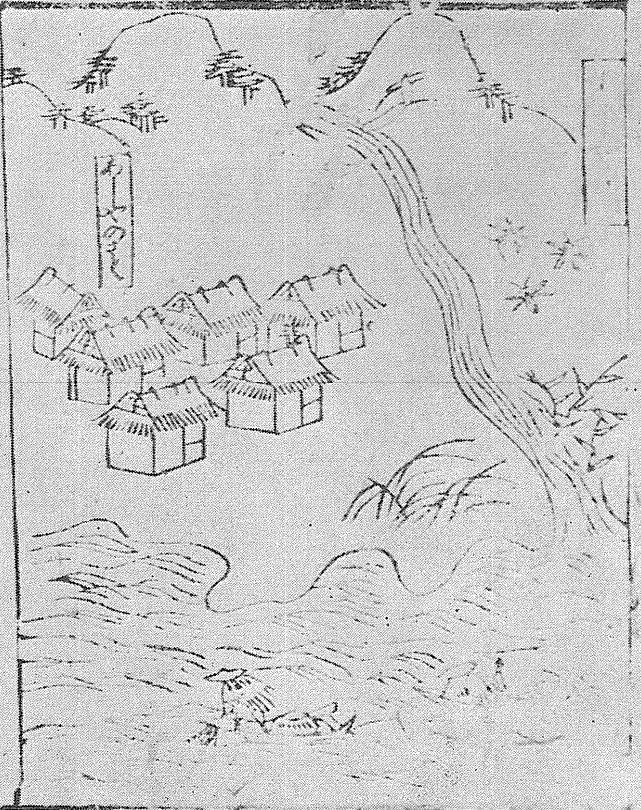
発行者 芦屋市教育長
三枝秀行

印刷所 岩岡書籍印刷株式会社

発行所 兵庫県芦屋市教育委員会



芦屋市域图



以予觀里

此亦在東三平 藤棠以知
 據元史更歷多祗有之

あし此處の缺りなき藤棠
 つまら小橋といふとさかたり
 業平

徳らむらひらきふらじ藤棠
 徳小町のあはれ里の御ふら博

常ふらむらひらき藤棠
 是水